

されど われらが日々——

柴田 翔





文春文庫

102-1

されど われらが日々 ——

定価 260円

1974年6月25日 第1刷

1980年1月30日 第13刷

著 者 柴田 翔

発行者 杉村 友一

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本はお手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan

文春文庫

されど われらが日々——

柴田 翔



文藝春秋

目次

されど われらが日々―― 7

ロクタル管の話 195

解説 野崎守英 229

本文庫版のテキストについて 253

されど

われらが日々――

されど

われらが日々――

道化　（王に）　おお、おい

たわしや、王様には裏
切られなさったと！

して、一体、誰方にて
ございます？

序 章

私はその頃、アルバイトの帰りなど、よく古本屋に寄った。そして、漠然と目についた本を手にとつて時間を過ごした。ある時は背表紙だけを眺めながら、三十分、一時間と立ち尽した。そういう時、私は題名を読むよりは、むしろ、変色した紙や色あせた文字、手ずれやしみ、あるいはその本の持つ陰影といったもの、を見ていたのだった。

それは無意味な時間潰しであった。しかし、私たちのすること、何か時間潰し以外のことがあるだろうか。それに、私は私なりに愛書家でもあったのだ。

どこの古本屋でも、店先に一冊二十円程度の均一本が一かたまり並んでいる。私はよくそういう本を、買う気もなしに手にとつたものだった。汚れ、みすばらしくなった本の群れを、一冊一冊見分けて行くと、『育児法』だとか『避妊法』、あるいは『革命と闘争』だとかいう題名の中に、時折、英文学専攻の大学院学生である私すら題名を知らないような英文学関係の古ぼけた翻訳書がまじっていた。訳者も多くは、もはや知られない人であった。私はそういう本を手にとると、本文よりも、訳者の後書きを読んだ。そこには、大抵は、まだあまり知られていないその書を日

本に紹介することが、どんなに有意義なことであるかが、少し熱っぽい調子で力説してあった。それは、その人の出した、一生でただ一冊の本であったかも知れない。おそらく、だから、後書きも少し興奮した様子なのだ。が、彼がそんなに期待して出した本も、殆ど人に知られることなく場末の古本屋の均一本の中につっこまれている。

だが、私は別にそういう後書きに吝^けをつける積りはないのだ。そのちょっと尊大な言いまわし、日本における文学観の偏向をいましめる学者らしい重々しい口調の中には、奇妙に子供らしい喜び、生の重大事にかかわっているという興奮からくる、意識しない快活さが感じられた。それは、かつて私の友だちであった一人の女子学生が自殺した時、彼女の友人の学生たちが、その死を悲しみながら、なお無意識のうちに示していた快活さ、あるいは嬉しさと言ってもよいようなものと似ていると思った。だが、彼ら訳者にとって、本を出すことはやはり重大なことであり、彼らはそのためにちょっと興奮し、快活になっていい当然の権利を持っている。生が結局は、各種の時間潰しの堆積であるならば、その合間に、ちょっと夢中になれる、あるいは夢中になった振りのできる気晴らしのあることは悪いことではない。俺だって、と私は、薄汚れた古本の間に立ちつづけながら思った。俺だって、あと半年もすれば、地方の大学の語学教師になり、やがて一冊位訳書も出すだろう。そしてその時は、俺だってやはりちょっと興奮し、熱っぽい後書きを書き、そして、少しの間、幸福になるだろう。

第一章

ある冷たい雨の降る秋の夕方、私は郊外のK駅のそばの古本屋に寄った。それはその月の最後のアルバイトの帰りであった。

いつも通り、何気なく古本に眼をさらしているうちに、私は上の方の棚にまだ真新しいH全集があるのに気がついた。それは、つい先月か先々月に完結した全集であった。あまり読まれることのないHの全集であるだけに、値も高いものであった。新刊本がすぐ古本屋に出ることは珍らしいことではない。しかし、かなりの愛着を持っている人でなければ、はじめから買わないだろうH全集が、最終の配本から一月足らずのうちに古本屋の棚にあることは、やはり少し奇異に感じられた。

私はH全集から一冊抜き取り、値段を調べた。それは、かなり安かった。私は買おうと思った。だが、それは定価の三分の二にもならぬ値段ではあったが、なお私の持っている金では足りなかった。私はその時、その日に貰ったその月のアルバイトの収入を持って、それだけは本に費やしていい金であったが、H全集はその凡そ倍の値であった。

私は、本屋で本を眺めるのは、好きであった。だが、ある本を、ただその本の魅力にひかれて、どうしても自分の手に入れ自分のものにしたという、いわゆる世の愛書家たちの執念といったものは、持ち合わせていなかった。H全集も、前から欲しいとは思っていたが、一冊ずつ買っても、なお非常に高いので、あえて買う積りはなかった。

しかし、今その真新しい一冊を手にとって古本屋の古ぼけた棚、崩れ落ちそうな本の堆積の間に立ち尽した私は、何か奇妙なものにとらわれていた。それはH全集というよりは、その一揃であるところの、私の前に並び私の手にある一揃が、あるいはその一揃の持つある一つの奇異な雰囲気、私の心に、いや、むしろ私の存在自体に、からみついてきているのだった。その奇異な雰囲気は、汚れ古ぼけた本の列と、新しいH全集という異様な対比から生まれたものであったが、ただそれだけで説明し切れるものではなく、そのH全集がそこにあるということ——それは何の変哲もないH全集であり、何の変哲もない古本屋であったが——そのH全集がそこにあるということ、その際、単に静的な新旧の対比が問題なのではなく、そのH全集の在る全ての関係における在り方、つまりそこにおけるH全集の存在そのものが、ある異様さとして、私に向ってきているのであり、それは私の存在の殆ど意識しない根にからみついて離れないように思われた。そのH全集を私が買うだろうということは、もはや動かし難いことであった。私は、自分の意志に反したことを無理やりせねばならぬような重苦しい気持で、帳場の方を見やった。

私がH全集の代金の半分を払い、残りの十冊を翌月まで取っておいて呉れるよう、頼んだ時、

無口で愛想のない主人は、眼鏡越しに私の顔をじろじろ眺めて、

「ようございます」

と言った。そして、口の中で半分呟くようにつけ加えた。

「こんな本を、買ってすぐ売ってしまう人もいれば、あんたみたいに無理して、また買う人もいるんだね」

私は妙に気になってたずねた。

「これを買ったのはどんな人でしたか」

主人はもう一度私の顔をじろっと眺めると、

「古本の市で買ってきたんだから、そんなことは判りませんよ」

とそっけなく答え、黙った。

外に出ると、雨は相変らず降りつづけ、その冷たさは背広のえりや、袖口から入り込んで、肌に執拗にまつわりついてきた。私はH全集を買ってしまったて、何故か不安な気持ちになっていた。

私は、背中から体中に拡がってくる悪寒に堪えながら、なお小一時間かかって下宿へ帰った。

雨は間もなく上がり、それから数日、空が抜けるような青さに澄み切った日が続いた。土曜日
も天気は崩れなかった。窓を開けると、さっぱりした冷やかな大気が部屋の中へ流れ込んだ。私は少し幸福だった。

土曜日は節子のくる日だった。節子は私の婚約者だった。私たちは翌年の四月、私が大学院の修士課程を修了したら、結婚することになっていた。私の就職は、F県のF大に内定していた。

節子は英語とタイプと、それに少しかりのフランス語ができ、翻訳係兼タイピストとして、ある商事会社に勤めていた。結婚したら節子はそのをやめ、F県で英語の先生の口でも探すつもりであった。私たちは結婚を、強いて急いではいなかったが、またあまりくり延べるつもりもなかった。

私たちは愛し合っていただろうか。それは判らない。恋人同士と呼ばれてよいような仕方では、愛し合っていなかったかも知れない。ただ私たちは、互に好感を持ち合っていたし、やって行けるだろうと考えていた。少なくとも、私は、自分たちの間柄について、そう考えていた。

節子は私の遠縁の親戚であった。そして、親たちが気が合い、親しかったので、私と節子は、小さい時から従兄妹同士のようなつき合い方をさせられてきた。だが、成長するにつれ、二人は自分たちが特別に気の合う間柄という訳でもないことに次第に気づいた。以前の節子は、今と違って、激しい気性だった。私もそうおとなしいたちではないだろう。しかし、節子の持っていた何ものかが、私には欠けていたらしい。私たちは中学時代、高校時代、休みには互の家に行き来して、遠慮のない親しい間柄ではあったが、互が相手の中へ深く入り込んでしまうということは決してなかった。

私が東大に入ってから上京してきた年、節子は高校三年であった。次の年節子は東京女子大に入り、

翌年英文科に進んだ。しかし、私は節子の家である佐伯をあまり訪れなかった。私は佐伯の人たちを嫌ってはいなかった。だが、それはわずらわしかった。私は節子に好意を持ちつづけてはいたが、佐伯の人の一人である節子よりは、ただの女友だちとつき合う方が心安かった。

そうやって、私は駒場で、留年の一年を含めて三年、本郷で二年、平凡な学生として過ごし、大学院に進んだ。専門は英文学だった。

その間、恋をしなかったと言え、嘘になろう。そして、恋する時、私は大体真面目だった。だが、私が真面目であればある程、私の恋は、いつも、真面目な恋とはならず、情事といったようなものになって行つた。ある時期には、私は自分の情事を、これは情事ではない、本当の恋なんだ、と思い込もうとし、またある程度思い込みました。だが、女の子たちは、私が彼女たちのことを、決して本当には愛していないこと、愛することのできないことを敏感に感じ取り、私から離れて行つた。

大学院に入った年の春、その合格祝いに招かれた佐伯の家で、私は、節子と結婚しないかということを、ほのめかされた。節子には異存はないような口振りであった。私はその話よりも、久し振りで注意してみた節子が、以前とははっきり違った感じを持ってきたのに、気をひかれた。感じのいい笑い顔、少し大人びたが、やはり娘らしい優しさ、時折見せる負けん気、そういったものには全然変りがなかった。だが、その時の節子には、どことなく、しかしはっきりと、以前には決してなかった、全ての事柄に対するある種の投げやりな感じがあった。節子知らぬ人な